

パスパ文字の翻字に関する覚書

吉池孝一

—

表音文字にはさまざまなものがあり、それをローマ字に置き換える方式として翻字(transliteration)と転写(transcription)の二つがある。一般的な用法にしたがい、文字を一对一の方式によりローマ字に置き換えたものを翻字と呼び、言語の音韻を考慮のうえ文字から得られない情報も加味しローマ字で表記したものを転写と呼ぶことにすると、パスパ文字で書かれた文の翻字と転写の主な相違点は二つとなる。一つ目は単語など意味の切れ目を明示するか否かという点。二つ目は母音aをどのように表示するかという点である。これにつき、思いつくところをPoppe,N.1957 (*The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J.R.Krueger, Wiesbaden.)の方法などを参照しつつ書きとめてみた。

二

先ず第一の点、意味の切れ目を明示するか否かということについて。Poppe(1957, pp.48-49)に収められたパスパ字モンゴル語碑文(Text .The Edict of Buyantu Khan, 1314(1))の中から関係する箇所を抜き出し翻字と転写を示すと次のようになる。

ア．パスパ文字は1音節ごとに繋げて表記され、その結果音節の切れ目が明示される。Poppe(1957)の翻字はそれを-で示す。意味の切れ目は翻字では示されず、転写において示される。

13行目 翻字：dēŋ-ri-yi-ǰal-ba-ri-ǰu-

転写：dēŋriyi ǰalbariǰu

天を 祈って

イ．パスパ文字はアと同様音節の切れ目を明示する。そのほか、意味の切れ目に対応した多めの余白がある。Poppe(1957)の翻字には多めの余白は反映されず、音節の切れ目を示す-と同じ記号を用いる。

1行目 翻字：moŋ-k' a-dēŋ-ri-yin-k' u-č' un-dur-

転写：moŋk' a dēŋriyin k' uč' undur

とこしえの 天の 力に

パスパ文字は通常アのように1音節ごとに一まとめにしるされ、音節の切れ目は機械的に示されるけれども意味の切れ目は示されることはない。これはパスパ文字の母体であるチベット文字の習慣に従ったため、単音節の形態素が多いチベット語や漢語などを表記するばあいには大きな支障とはならないけれども、多音節語が主体となるモンゴル語やトルコ語などを表記するばあい不便この上ないものとなる。もっとも、イのように、意味の切れ目に対応した多めの余白が設けられている部分もある。Poppe(1957)はこのような多めの余白を翻字に反映させなかった。これを無意味なものとしたためであろう。立場をかえて有意味なものとして翻字に反映させる行き方もある。多めの余白を----で示すと以下のようなになる。

翻字：moŋ-k' a-----dɛŋ-ri-yin-----k' u-č' un-dur-

このような分かち書きともとれる多めの余白は聖旨の初頭の三行に見られる。おそらくこれは、書き出し部分の外観を整えるための処置にすぎないのであろうが、意味の切れ目に対応していることもまた事実である。このような分かち書きは多音節語の使い手にとって便利なものであるけれども、文章一般に応用されることはなかった。もっとも、これは特殊な例で、通常は機械的に音節と音節の切れ目を示すだけで、翻字も同様なものとなる。この点、翻字がそのまま意味の切れ目を示すウイグル文字の文とは大いに異なる。

三

次に第二の点、母音 a の表示について。パスパ文字では a は直接には表記されない。これは母体となったチベット文字をとおしてインド系文字の特徴を受け継いだためである。したがって、子音文字(C)の後に他の母音が表記されないばあい、その子音文字は a を包含していると見て a を補写し Ca とする。これについては、a が表記されないという事実を重視し a を表記しないという立場と、裸の子音はもともと a を包含しているとみて a を表記するという立場がありうる。もっとも、寡聞にして前者の立場をとり C のみで翻字する例は知らない。先の Poppe(1957)は Ca としており後者の立場であることがわかる。服部四郎 1946(『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』)は C(a)とし、実際に表記されない a を括弧でくくる。二つの立場の違いを巧みに乗り越えている。

さて、Poppe(1957)のアで見た翻字の-ǰal-ba-であるが実際の字面は-ǰl-b-であり a は明示されず子音文字のみがある。

そこで、字面において子音文字が-CC-もしくは-CCC-のように連続しているばあい、言語によって a の補写の仕方が異なることになる。漢語やモンゴル語では音節の初頭に二重子音は立たないので、文字表記にあっても音節の初頭で子音文字が二つ続くことは通常ない。したがって、一字目の C は音節初頭子音、二字目の C は音節末子音ということになり、-CaC-とする。なお、-C-のように子音のみ記されるばあいは-Ca-とする。それで、-ǰl-と-b-はそれぞれ-ǰal-と-ba-となるわけである。しかしながら、音節初頭や末尾に子音文字を複数つらねるパスパ字チベット語文などを候補にに入れて検討すると、なかなか厄介なことになる。ここに『KOTONOHA』21号で紹介した dbaŋ-・dus(帰順)というパスパ字チベット語の印鑑がある。dbaŋ-の実際の字面はdbŋ-で、これをチベット語と特定する前の段階では、dabŋ-、dbaŋ-、dbŋa-の可能性を考えながら読みを試みることになる。翻字の対象が、蒙古語であり漢語であり又チベット語であることが分かって初めて、a の適切な補写が可能となる。何語であるか分からない段階では、字面で-CC-もしくは-CCC-であるものは、a を補写する立場をとれば翻字では-CaCa-もしくは-CaCaCa-とせざるを得ない。パスパ文字は1音節ごとに分かち書きされるわけであるから-CaCa-や-CaCaCa-のように複音節が一まとまりに記されることは普通ないのだけれども、何語か分からない段階ではこのようにせざるを得ない。この点を考慮し、多少煩瑣であるが私は服部四郎(1946)の C(a)とする表記を用いて-C(a)C(a)-、-C(a)C(a)C(a)-としている。

四

先に、「パスパ文字は1音節ごとに分かち書きされるわけであるから-CaCa-や-

CaCaCaのように複音節が一まとまりに記されることは普通ない」と述べたけれども、まれに続けて記されるものもある。すなわち、Zieme,P.1998(‘Turkic Fragments in ’Phags-pa Script’ 『内陸アジア言語の研究』)に収められたパスパ字チュルク語の断片「TM191」である。このパスパ文字は手写であり、音節と音節の切れ目は明示されず、繋げて書かれている。母音 a を補写せず当該部分を字面の通りに翻字すると次のようになる。

[欠落]boluryšiŋt‘ ub[欠落]

子音の r,y, ŋが音節初頭子音であるならば a を補写しなければならず、音節末子音であるならば a の補写は不要である。そのどちらであるかは、ふつうには音節の分かち書きを参考とするのだが本資料には音節の切れ目は明示されていない。

Zieme(1998)は次のように、母音を伴わない子音、すなわち r,y, ŋの後に機械的に a を補写し翻字とする。

翻字：[欠落]bo lu ra ya ši ŋa t‘ ub[欠落]

転写：[欠落]bolur yašiŋa tub[欠落]

なる。年齢に(所有+格)？

a を機械的に付しているわけであるから補写の恣意性は免れることができる。先に示したように a を補写しない立場をとることも可能である。しかしながら a を補いつつ読み進むよりも、Zieme(1998)のように、a を包含する可能性のある全ての子音に対して初めから a を補写し、その後、意味と音形を考慮しつつ a を削除するという方が実践し易いと私は感じている。

五

このようにみえてくると、初めに挙げた Poppe(1957)の翻字法は、母音 a の表記については、解釈すなわち転写の要素を加味したものということになる。もっとも、Poppe(1957)は最初からモンゴル語と分かっている資料について翻字したわけであるから、これはこれで理にかなっている。しかしながら、未解読のパスパ文字資料を取り扱う場合、対象となる言語が何語であるか分からない。それが建て前である。まずは翻字の対象となる言語が何語であるか分からないという建前から出発し、煩瑣ではあるが、a を包含する可能性のある全ての子音の後に(a)を補写し、対象となる言語が特定できた段階で、解釈を加え不要な(a)を削除する。そして必要な(a)については括弧()を外して表記する。ここまでを翻字の段階とする。もっとも大方の場合、最初から何語であるか分かっており、読み進めつつ必要な箇所に a を補写するというのが実際のところであろう。最後に、意味の切れ目を明示する転写を採用するという手はずとなる。